

伊東寛著 『第5の戦場』サイバー戦の脅威 祥伝社新書、祥伝社、2012年2月10日刊を読む

### 『第5の戦場』サイバー戦の脅威

1. 2011年9月に三菱重工がサイバー攻撃を受けたという報道はまだ記憶に新しい。
2. 著者もセキュリティ企業に勤めている関係から、この件に関してマスコミから何度か取材を受けたが、その中にこのような質問があった。  
「なぜ、今年、日本の企業に対してサイバー攻撃が行なわれたのでしょうか？」
3. 著者の返事は、「それは質問が間違っています。正しい質問は、なぜ、今年このような事件が大きく報道されたのでしょうか？ですね」
4. そうなのだ。今年ではなく数年前から、防衛産業といわず我が国の多くの企業が外国からなにかしらのサイバー攻撃を受けており、貴重な情報が盗まれていたのだ。
5. では、なぜ今年が大きく報道されたのか？
6. 可能性はいくつかある。三菱重工自身は自社の恥が外に出ることを好まないだろうから、内部の人が攻撃を受けたとリークした可能性は低い。また、専門家としてこれに関わっていたセキュリティ会社の人でも守秘義務の観点から顧客の情報を漏らすことは考えられない。とすると、ありそうなのは警察からだろうか。警察にも脇の甘い人がいて、(例えば)Y新聞の美人記者の誘導尋問に引っかかってついうっかり秘密を漏らしたのかもしれない。
7. いや、その可能性も高くはない。そのようなことをする記者も(たぶん)いないだろうし、警官もそれほどダメではないだろう。それよりも、以前、海上保安庁の職員が義憤に駆られて非公開のビデオ映像をネットに上げたように、最近のサイバー攻撃の多さとそれがまったく世間に知られないために同じような被害を受ける会社が多々あることに業を煮やした警察官版の「sengoku38」がいたのだと考えたほうがありそうに思える。
8. 本書の中でも触れるが、三菱重工事案のように、企業の持つ各種情報を盗もうとする動きは2000年頃から起こっていたし、それらに関する報道もアメリカなどではかなり頻繁に出ていた。アメリカで起こっているのに、日本の企業に対してはサイバー攻撃がなかったと思うほうがよほどウブかもしれない。

9. 社会がコンピューターとインターネット技術を中心とする、いわゆるサイバー技術を利用するようになって、我々の生活はとても便利になった。
10. 一方で、社会はその脆弱性をどんどん増している。人々が依存しているシステムは目に見えないところで複雑化している。いまでは技術者でさえその全貌がわからなくなり、それゆえに危険性は増しているのだ。電気や通信、交通といったインフラや工場、プラントなど現代の施設では、ほとんどと言っていいほどコンピュータシステムが動いている。ある国家にダメージを与えようとしたら、そこを狙えばいい。テロリストや多くの国の軍隊はそう考えている。つまり、私たちの生活そのものが危険に曝<sup>さら</sup>されているのだ。
11. 本書では、サイバー技術の発展が社会にどんな影響を与えており、危険性はどうなっているのかについて述べる。そして、筆者が元自衛官であるという、ちょっと変わった経歴から、サイバー技術と戦争との関わりについて記述する。
12. 2011年7月、米国防総省はサイバー空間を、陸・海・空・宇宙空間に次ぐ「第5の戦場」と宣言し、サイバー攻撃に対して武力をもって反撃することを明言した。その背景には、米国の危機感、そしてすでに「見えない戦争」であるサイバー戦が世界中で起きている事実がある。
13. 鉄器や火薬から原子力まで、過去にもいろいろな技術が発明され人類の生活をより良くしてきた一方で、それらが戦争に用いられ、不幸を招いたことも否定できない。
14. この歴史の流れの中で、世界におけるサイバー技術の進歩とその社会や軍隊への取り込みは極端に早く、特にそれへの対策という面で日本はすでに出遅れている。攻撃を受けても法律上、自衛隊は出動できず、各省庁の役割分担は曖昧<sup>あいまい</sup>だ。
15. 今、早急な対応を取らなければ取り返しのつかないことになる。特に、サイバー上の出来事は目に見えないため、知らないうちに攻撃が準備されていたり、私たち自身が攻撃に加担してしまっていることもある。
16. この危機に気がつきそして目覚めていただきたい、そう願ってこの本を書いた。本書が、サイバーに関心を持つ皆様に、何らかの気づきを与えることになれば幸いである。

[コメント]

現代におけるリスクマネジメントの対象であるサイバー攻撃対策の第一人者で、元自衛官であり陸上自衛隊初のシステム防護隊、初代隊長の伊東寛氏の代表的著作。MOT、アドバンスコースリスクマネジメントコースの基本テキストの一冊に加えたい。